助け合いのネットワークをつくるにあたり、既存の助け合い活動を生かすにはどうすればよいか

提言

地域には、まだまだＳＣが気が付いていないアイデアの持ち主や活動が隠れている。広い地域のニーズに応えるためには、いつもの仲間との活動だけでは限界がある。より広い視点をもって多様な地域の住民グループに飛び込み、彼らの活動の背景を理解し、敬意を払い、寄り添うことで、既存の活動はＳＣに新しいアイデアや選択肢をもたらしていくだろう。

登壇者

【進行役】	岩名　礼介氏	三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング（株）共生・社会政策部長、主席研究員
【アドバイザー】	岡河　義孝氏	（独）福祉医療機構総務部長
	石合　亮氏	羽生市高齢介護課（第１層ＳＣ）
	渡辺　隆志氏	（社福）羽生市社会福祉協議会事務局次長
	山岡　伸次氏	長浜市第１層ＳＣ
	高木　佳奈枝氏	竹田市第１層ＳＣ

■ 寄せられた声から

- 既存サービスの条件を少し緩くすることで、取り組みに広がりが生まれ、窮屈さがなくなり良い影響もある。
- 岩名さんのまとめや進行、提言にいたって卓越されているところが印象的でした。
- 山岡氏の「相手（住民）のことを見ていなかった」という言葉。距離感も必要ですが、活動する中で相手を理解する必要性があると考えさせられました。
- 高木さんの既存の地域組織に新地域支援事業を説明する際、「皆さまのこれまでの活動を、やっと国が認めてくれた」と説明し受け容れてもらったというお話が笑顔とともに素敵でした。

議事要旨　岩名 礼介氏

「既存の活動」をＳＣの視点から考えると「ＳＣから見えている」活動と「ＳＣからは見えていない」活動に整理できます。例えば民生委員や町内会の活動、従前からある住民活動は多くの場合「見えている活動」です。行政やＳＣが企図する活動にこれらの活動が協力してくれるかどうかは、ＳＣのアプローチの仕方でも違いがでてきます。

現在７か所まで広がった羽生市の生活支援活動拠点も、当初は２か所から始動。出前講座や寸劇など伝え方を工夫しながら、勉強会も広域から徐々に小地域に絞りこみ、関心をもつ住民の把握につなげています。新しい活動を地域に無理に押し込むのではなく、地域ごとの活動経緯も理解しながら丁寧に話し合いを重ね、活動を広げています。

住民の中には行政からの「頼まれごと」に疲弊し、ＳＣの働きかけを疎ましく感じる人も。長浜市では、二度の市町村合併による地域づくり体制の変更で住民に「振りまわされ感」や「やらされ感」が強かったこともあり、新たに協議体を設置せず既存の会議体と丁寧に話し合いを重ねて取組を進めています。行政からの一方通行の情報提供ではなく、既存の住民活動や組織に対する敬意を持った丁寧な対応が大切になります。

一方で、ＳＣから見えていない既存の活動も大切です。顕在化している地域資源は実はごく一部でもあります。氷山のように、見えていない場所にも多くの地域資源が存在します。多様化する生活ニーズに対応するには、埋もれて見えていない地域の意欲ある住民や活動を発見することも大切です。

竹田市では既存の地区社協と連携し生活支援拠点を成功させていますが、生活課題を把握する調査を訪問で実施することにより濃厚な住民とのコミュニケーションを実現。ＳＣからは見えなかった意欲のある住民の発見につながっています。

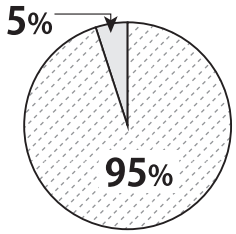
長浜市では地域活動の範囲を、町内会域や連合自治会域、包括域、市域など多様なサイズでとらえ、活動内容によって意見交換や研修会の地域単位を変えるといった工夫でより多様な資源の発見や効果的な取組につながっています。

また、今後は新しい地域資源の発見に向け「高齢者」「日常生活圏域」「町内会」といった枠組みを超えて、地元企業の経営者や子育てなど他分野の団体、地元の小学校といった多様な組織・グループとの関わりを持つことも大切になるでしょう。

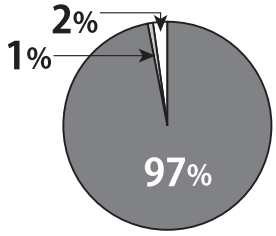
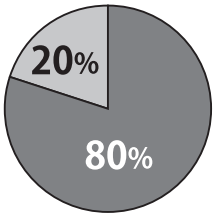
こうした丁寧で柔軟な活動を実現するには、ＳＣの配置も大切な要素です。羽生市（人口５．５万人）で３．５名（兼務を含む）の体制ですが、きめ細かな対応には十分な配置とはいえないとの認識でした。竹田市では人口２万人の町にＳＣが６名、長浜市では11．６万人の町に専従で12名のＳＣが配置され、充実した体制がきめ細かな関わりを可能にしています。地域づくりは個別の人と人のつながりから積み上げていくことが基本です。これを実現するための人員配置は、既存の活動を生かす上での前提といえるでしょう。

アンケートの結果　参加者概数：280名（オンライン：273名、会場：７名）　回答者数：94名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方